



話題の本棚

ソニア・ソトマイヨール著、長井篤司訳『私が愛する世界』

ウンベルト・エーコ著、和田忠彦監訳『ウンベルト・エーコの世界文明講義』

特集／漫画

新刊コーナー／新書コーナー／名作を読む／知識人論への誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/



univ.

京大生協

CO-OP

綴葉編集委員会

弱さを知るが故に共感し、強さを抱くが故に孤立する。

私が愛する世界

ソニア・ソトマイヨール 著

長井篤司訳
亜紀書房



——法の生命は論理ではなく、経験である——

オリヴァー・ウェンデル・ホームズ

かつてオバマ前大統領は自らの演説の中でこの格言を引用し、こう続けた。「多くの障壁や困難に直面してきた経験、それにもめげずにこれらの困難に打ち勝ってきた経験。この経験こそ、人々への共感を抱かせ、いかに世界が動き、人々がどう生きているかを理解させるものである。その経験こそが、最高裁の判事として絶対に必要なものである」と。

そしてこの演説で紹介された人物こそ、現連邦最高裁判所判事である著者ソニア・ソトマイヨールである。法を支え、人々を理解し、アメリカ社会を見守る彼女の経験とはどのようなものか。彼女の回想録である本書は、一人の人間の記録としてだけでなく、多様性が謳われる社会に必要な「力」を私達に教えてくれる。

不運と苦難の半生

彼女の半生は、まるで物語の主人公のように波乱万丈だ。幼い頃に患った糖尿病、若き日に失った父親、プエルトリコ移民として英語が話せない環境。不運と苦難に囲まれても母は教育を惜しまな

った。百科事典を与えられカトリックの高校に通った彼女は、名門プリンストン大学に入学する。しかしそこでも多くの差別を経験した。積極的差別是正措置への偏見、女性への蔑視、移民への眼差し不遇を乗り越えた成功物語としても、本書は充実している。

しかし本書の魅力は、情熱的な彼女の裏に隠された、冷静さと孤独である。デモ運動に熱を上げず淡々と実務をこなし、声をあげることもよりも、話を聞くことの方が優位に立てると述べるソニア。逆境を覆す熱い主人公とは違う彼女の姿を見る時、こうした冷静さこそ、厳しい半生を最も支えた力なのだと思えてしまう。自らを「調整者」と称し人々の利害調整を買って出る彼女。そうした調整こそが社会を変えるのだという思考は、判事への夢へと繋がっていく。

「壁を作るより橋を架けなさい。」

困難という「壁」は外部からやってくると同時に、時に自ら築いてしまう。プエルトリコにいる親類をみた時、自ら決めた限界に縛られている人々を見た。共同体は「ここにいていいんだ」という安楽と同時に、「ここにしかいられない」呪縛も授けてしまう。「自分の強みを自覚するためには、常に外側に目を向けること」という台詞は、苦難を乗り越えてきた彼女がマイノリティの人々に授けた言葉だ。外を見れば人は戸惑うが、そうした戸惑いを繰り返すことでしか、人や社会は改善していかない。法はその支えとなる。

アメリカを支えるのは、成功の裏側にある優しさと寂しさだ。弱さを知るが故に共感し、強さを抱くが故に孤立する。しかしだからこそ彼女は、この「世界」を愛しているのだろう。

(きもの)

(四四八頁 税込二八〇八円 9月刊)

さあ、巨人の肩に乗って

ウンベルト・エーコ

世界文明講義

ウンベルト・エーコ著

和田忠彦監訳

河出書房新社



原著のタイトルは『巨人の肩に乗って』。ウンベルト・エーコは、まさに知の巨人と称するにふさわしい人物であろう。本書はエーコが死の一年前からミラノの芸術祭でおこなった、一〇あまりの講演から成る。「絶対と相対」「見えないもの」「芸術における不完全のかたち」……等々、講演題は魅力的なものばかり。一〇〇を超えるカラー図版もありがたい。ここでは興味深い二つの講演をとりあげる。広大な知の海に、そしてまるで小説のようにスリリングに知識をあやつるエーコの手腕に、愉悅とともに溺れてみよう。

「美しさ」

『美の歴史』刊行の一年後におこなわれたこの講演は、意外にもこのような告白からはじまる。美とはなにか、「誰にも尋ねられなければ答えは分かっていない。だが、それを尋ねる者に説明しようと思うと、それができない」(アウグスティヌス)。時代や文化によって美の概念は変化する。美しい女性、という同じテーマをあつかった詩や絵画であっても、中世のそれと一九世紀のそれとが正反対のイメージを呈していることに(豊富な引用とカラー図版のおかげで)気づかされる。それでは、さまざまな時代の美しいものに共通するものとはなにか? 彼の出した答えは、美における「公平無私

という要素」だ。たとえ所有したり参与したりできなかったとしても、美しいものは変わらず美しい。「美の経験とはいっても、わたしたちがその一部をなさないこと、どうしても直接参加したくないようなことを前にして、そこに背をむけながら感じるものだったように思う」。思わず膝を打つような、見事な解答ではないか。

「秘密についてのいくらかの啓示」

「まずはじめに断っておきたいのは、これから話すことはきわめて重要だが秘密にかんするため、口をつぐむ必要があるということだ」。大きくとりあげられるのは、薔薇十字団。内戦と宗教的対立のさなかの一七世紀初頭、薔薇十字団はその存在を世に示した。ただし、わかるのは存在しているということのみ。薔薇十字団を秘密結社たらしめるのは、団員であることを明かしてはいけないという鉄の掟。「みずから薔薇十字と名乗る者は(入会者たちを繋ぐ絆に反するため)その成員ではない」——かくして組織は秘匿される。自身の小説『ブーコーの振り子』にもふれつつ、エーコは秘密にかんする秘密を打ち明けてこの講演を締めくくる。「喉から手が出るほど求められているのは、暴くことも手に入れることもできない秘密にむけられた凄まじい渴望であるということだ」。我々が求めるのは秘密の内容ではなく、秘密そのもののなのだ。

*

豊かな世界に、ドラマティックな語り。引用をふんだんに使った知識の波に酔いながらも、エーコの肩の上まで登ってみよう。自分にはたどり着かない世界を見る、これこそ知の醍醐味だ。(ミセ)

(四三三頁 税込四九六八円 11月刊)

フルーツバスケット (全12巻)

高屋奈月著 白泉社

私が本書と出会ったのはまだ中学生の頃。妹の漫画を盗み見ていた私は本書に衝撃を受け、子供心に恐怖を覚えながら、どこか思春期の不安を描いているように感じていた。再アニメ化が放映される今年、未読の方もこの機会に読んでみてはいかがだろうか。



物語の軸となるのは「獣つき」と呼ばれる13人の男女。彼らは異性に抱きしめられると、獣に変身してしまう奇妙な呪いに縛られていた。親に抱きしめてもらうこともできず、異性とも距離をとって生きなくてはならない彼らは、表面で取り繕いながらも、心に傷を抱えていた。そんな彼らの秩序は、主人公「本田透」を中心にかき乱されていく。

この歳になって読み直してみると「抱きしめてもらえない」彼らの悩みと同じくらい、「抱きしめることが出来ない」親たちの辛さも分かってしまった。壊れてしまったのは呪いを受けた当人以上に、その周りだった。愛する人と触れ合える、そんな当たり前のことが失われてしまうと、人は愛を確認することが出来ないのだ。本書の魅力は何よりも、目を背けたくなるような「人間の弱さ」が示されるところである。現実を引き受けられない人々は、横暴になり、閉鎖的になり、時に「忘却」に逃げ場を作る。

自身の弱さと向き合うことが、こんなにも難しいのだと描く一方で、弱さと向き合う意志を持った者だけが、変わっていけるのだと本書は教えてくれる。大人になるという意味を、私はこの漫画から教わった。十数年越しに読んだ本書は、少しだけ絵が古びて見えた。老いていく私を育ててくれた、変わらぬ友人と会えた気がした。

(きもの)

(第1巻 390頁 税込950円)

特集

漫 画

餅にお菓子に、炬燵にみかん。至福とはまさにここにある。TVの特番もいけれど、似た内容にすぐに飽きてしまう。寝転がって娯楽を探すあなたの為に、漫画特集を組みました。寒い日は無理に外に出かけず、ごろりと横になって漫画でも読みましょう。「睦月」は「仲睦まじい」という意味もあります。漫画を読んで、語り合って、青春のひと時を過ごしていただろう。

(ササ)



Helck (全12巻)

七尾ナナキ著 小学館

マンガといえどとにかくバトル！ 手のひらからエネルギー波を出し、腕は自由自在に伸び、携える剣は日本刀か、もしくはとにかく巨大なのがよろしい。そういうマンガを生まれてこの方読み続けてきたけれど、じゃあ『綴葉』でドラゴンボールの話はなんか違う。そう思ったので、今回は僕のような読者も満足させられそうな『Helck』を紹介します。

魔王が勇者の手にかかり倒れた後の魔界。そこで開催された新魔王決定トーナメント（トーナメント！）に突然現れた人間の勇者ヘルクが、なんだかんだで魔界帝国四天王のヴァミリオと共に旅をし、時に争い、そして次第に友情を育みながら、魔物と人間の争いの背後にある巨悪に立ち向かっていく……。

作者はニコニコ静画出身、小学館のアプリでの連載という作品情報を知らなくとも、圧倒的な力で敵を倒していくヘルクの姿はなんとなく某人類最強ハゲマントを思わせる。だが、それに勝るとも劣らない魅力がこの作品には詰まっている。キャラクターのゆるっとした個性とシリアスの程よいミックス、動きのシーンをごちゃごちゃさせない作画、そしてヴァミリオを始めとした女性キャラクターがまっとうに、かつかわいく描かれている……など、挙げ始めればキリがない。

一昨年の12月に全12巻というちょうどよい冊数で、惜しまれながらも完結した本作。王道をダラダラと走り続ける作品の多い中で（そういう作品も面白いけど）、ちゃんとのめりこめて、気持ちよく読み終わられることも実は貴重なのでは？ 試験明けの解放感のお共にぜひ。（Web掲載のスピンオフ『ピウイ』も読後にお忘れなく）

（トロ）

（第1巻 198頁 税込596円）



MAMA (全6巻)

売野機子著 新潮社

マンガには、リズムがある。小説にはないそのリズムが、物語のなかの人びとに命を吹きこむ。吹き出しは吐息となり、コマ割りは鼓動となる。流れる時間のなかで言葉を紡ぐ彼らは、わたしと同じ生きた人間だ。

売野機子『MAMA』の魅力は、なんといってもそこにたしか時間流れていることだろう。主人公はまだ変声を迎えていない、合唱団の少年たち。〈この世界には 飛び抜けて歌声の美しい男の子が生まれることがある〉。彼らは〈天使〉と呼ばれるが、そのほとんどはいずれ変声し青年になる。しかし、ほんの一握りの少年は〈その声の美しさが頂点に達したとき 命を失いほんとうの天使になる〉。ページから溢れ出すのは、透きとおるようなコーラスと死の香り。でも、彼らは迷い悩みながらたしかにそこで生きている。

少年たちはそれぞれに愛情に飢えている。たとえば、貧しい家庭に育ち体売ってきた少年ガブリエル。金稼ぎの手段としてしか扱われてこなかった彼は、〈ママ〉からの愛に焦がれる。死を前にしてもなお〈天使〉にあげられる仲間たちに疎外感を覚え、彼は寄宿舎を飛び出して夜の街をさまよう。そんな彼を、友人ラザロが呼び戻しにくる——〈助けて〉〈その言葉を待ってたよ〉。〈ラザロに手を引かれて歩きながら 子供みたいと思った暖炉とかバスタブとか温かいものを思い出しながら 光が 夜が うしろへ流れていく〉。〈ママ〉を求める少年どうしが不器用ながらに関係を結ぶすがたは、うつくしい。

最終巻の展開がやや急ではあるが、時の流れのなかで生きる少年の揺れ動きを描いた本作の魅力は、語るに余りある。

（第1巻 183頁 税込648円）



寿司 虚空編 (全1巻)

小林銅蟲著 三オブックス

いったいこれは何の漫画なのか。少なくともグルメ漫画ではない。かといって、バトルものでもない。これは、「巨大数」のヤバさを人に伝える漫画である。



「巨大数」とは、とてつもなく大きい数のことである。読者の皆さんは幼少のころ、とにかく大きい数の名前を覚えて意味もなく使ってみたことはないだろうか。大きいものは強そうでかっこいいのだ。しかし、本作品のテーマとなっている数は、そのような素朴に考えられる数よりもはるかに大きい。想像すら困難なほど巨大な数が現実存在するということには、宇宙の果てを覗くような恐怖すら感じられる。

本作品が表現しているのは、そうした巨大数的な世界観とも言えるだろう。ストーリーがあるわけではなく、巨大数の解説を主な軸として、理不尽な展開を繰り返しながら話は展開してゆく。なぜ寿司屋が巨大数のプロなのか、あるいは現われる異形の生命体はなんなのか、といった基本的な疑問点は放置される。それは一見すると狂気近く、読者の理解を拒んでいる。しかし、このような表現の数々はある意味で、日常生活を超越した極めて大きな数の世界にふさわしい。なぜならば、巨大数のことをひとたび知れば、世界の見方が変わることは免れないからだ。この宇宙にある素粒子の総数すら取るに足らない数に思えるようになる。このような世界観の変化を漫画的に表現すれば、こうなってもおかしくないだろう。

とはいえ、人を選ぶ作品であることには間違いがない。Webでも読めるので、まずは試し読みしてみたいだろうか。

(蔵餅)

(222頁 税込1280円)

BLUE GIANT (全10巻)

石塚真一著 小学館

人は困難にぶつかったときに一度立ち止まって悩み苦しむそこから自らを反省したりする。もちろん、それも大切なことだろう。しかし、悩んでいる時間なんかない、そんな後悔している暇があったらただ前へ一歩踏み出せ。その一歩は大きな一歩だ。それこそ悩みを解決してくれる手段なのだ、と考える道もあるだろう。本作はそれを語り続けている。

本作は、『岳』などでも知られる作者によるジャズのサクソプレイヤーを目指す男の成功譚である。主人公・宮本大は高校生のときに聞いたジャズに衝撃を受け、そこから「世界一のサクソプレイヤーになる」ことを志す。もちろん、その道のりには様々な困難が待ち受けるがその壁を打ち破って成長していくというストーリー。ジャズが題材という以外はよくあるマンガのようだが、このマンガの醍醐味は主人公を始めとした登場人物たちのただ前のみを見据える強さだと思う。ジャズはスマートなものと思われているが、本作はそういうジャズのスマートなイメージを壊し、ジャズは徹底的に自己を曝け出すものであるとしている。登場人物たちはジャズを通して、後悔先に立たずの精神でただ前へ進もうとする。そういう前のみを見据える登場人物たちの姿勢と自己を曝け出そうとする力強いジャズの演奏が、このマンガを読む人に前へ進む勇気を与えてくれるのだ。

困難に出会ったときには人は様々なことを考えて立ち止まる。それも悪くない。しかし、後悔なんか考えずにそこから一歩踏み出してみたらそこに視界が開けるのでは、と本作は教えてくれる。悩んだときにがんばろうと思わせてくれる一冊だ。

(ういうろ)

(第1巻 222頁 648円)



大人のための学習マンガ それゆけ! 論理さん(全1巻)

仲島ひとみ著 野矢茂樹監修 筑摩書房

「アンパンマン」を観ても、決してアンパンマンになることはできない。しかし、このマンガを読んで、その内容をしっかり理解できた暁には、きっとあなたも、一人前の「論理さん」になっていることだろう。



本書は、『新版 論理トレーニング』など、論理学の一般向け入門書を数多く出版していることでも知られる、野矢茂樹氏監修による「大人のための学習マンガ」である。そして、そのストーリーは、個性豊かな四人の高校生が、突如現れた論理の達人、ノヤ・カメキ先生（野矢氏曰く、このカメキ先生は「実在の人物とは無関係である」）とともに、「論理」にまつわる様々な知識を学んでいく、というものである。「必要条件／十分条件」や「逆／裏／対偶」といった、高校数学でもおなじみのテーマから、現代の論理学を語るに欠かせない「述語論理」の基礎知識に至るまで、各章ごとに様々なテーマが取り扱われる。また、読んで知識を得るだけではなく、章末の「問題演習」や、巻末の「卒業問題」に挑戦することで、自分の内容理解度を実際に試すこともできる。

本書での論理学的知識への言及は、あくまで簡略化されたものにすぎない。しかし、入門するにあたっての敷居は、その分かなり低いものとなっている。「論理学」に何となくの食わず嫌いをしてしまうすべての人に、まずは読んでみてもらいたい一冊である。

なお、出版社による本書の特設サイトでは、問題演習や卒業問題用の解答用紙が頒布されている。このマンガを読んで、それぞれの問題にトライしてみる際には、これを活用してみるのもよいだろう。

(八雲)

(224 頁 税込 1620 円)

新装版 黒旗水滸伝 大正地獄篇 (全4巻)

竹中労著 かわぐちかいじ画 皓星社

「大正アナキズム」を題材とし、70年代後半に『現代の眼』誌に連載された本作は上段に劇画、下段に散文が配置された異色の作品である。下段担当の竹中労は当時、世界革命浪人（ゲバリスタ）を自称し、窮民革命論、すなわち下層プロレタリアートや被差別者、植民地窮民による日帝打倒を唱えていた。竹中が窮民革命思想の原典と称する『水滸伝』にアナキズムの象徴である「黒旗」を冠した本書は大杉栄やその同志たち、ギロチン社の面々、難波大助、朴烈と金子文子といったアナキストたちを中心に大正時代の多士済々を生き生きと描いている。

かわぐちかいじが描く上段の劇画は、竹中によるコマ割りまで指示された詳細なシナリオに基づくものだ。かわぐちはほぼ同時期に単著『テロルの系譜』で日本近代のテロルをオムニバスで描いているが、その中でも甘粕事件や虎ノ門事件をとりあげている。甘粕の証言に沿って甘粕自身による絞殺として描いた同書とは対照的に、本作では竹中の推理にしたがって集団による暴行虐殺として描き、そこに国家最高権力の意志を見出す。また、難波大助の描写も本作のほうがより真に迫ったものとなっている。

竹中の蘊蓄豊かな語りとそれを支える窮民革命論は半世紀の時を超えて大正時代の諸運動と、ひめゆりの塔事件や東アジア反日武装戦線、三里塚運動などを結びつける。では、差別と搾取が猖獗を極める現代において窮民革命はいかにアクチュアリティをもちうるだろうか。辺境最深部でおこる様々な叛乱をいかに結びつけ、そこから出撃できるかが問われている。

(霊人)

(第1巻 330 頁 税込 1296 円)



新刊コーナー

スターリンの葬送狂騒曲
 フアビアンニュリ著 大西愛子訳
 小学館集英社プロダクション



今月号の特集ではマンガを紹介したが、実は本書もマンガである。昨年の夏に日本でも

公開された映画の原作として総力ラー版で本書は出版された。『狂騒曲』と銘打っている通り、スターリンの死とその後の後継者争いについての一騒動を追った作品である。

レコードを聴いているうちに倒れたスターリン。それを知らされた側近のマレンコフ、モロトフ、フルシチョフ、ベリヤ等はスターリンの容態を見舞いに行くが、彼らの頭の中は早くも次のことで一杯だった。後継者問題である。彼ら側近とスターリンの太子との確執、側近たちの間での内輪探め、スターリンの葬儀で的一幕、どんでん返し、権力争いとその巻き添えを食う民衆たちの場面は権力者と民衆との暮らしがいかに乖離しているかということを読者に晒している。

近年、ヒトラーやスターリン等かつての独裁者をテーマにした映画が話題を呼んでいる。彼らを作品のテーマに据えることが可能になったのは、その時代が遠のいたことを示しているのだろうか。しかしそれは同時に当時に対する実感が薄れていることにもつながる。現代の政治状況がかつてと似たようになっていくからこそ、警鐘の意味を込めてこのような映画が作られているのかもしれない。

映画と史実とは異なるという解説も載っているが、春休みに今一度当時の政治状況を本書片手に映画として体験してみてはいかがだろうか。

(一四四頁 税込三三四〇円 7月刊)

方丈記

鴨長明著 蜂飼耳訳
 光文社古典新訳文庫



その人の時代は、まことに生きづらい時代だった。都を襲う大火、竜巻、突然の遷都、飢饉、大地震。その人の人生も、思うようにはいかなかった。下鴨神社の神職の家に生まれながら、一族の思惑に阻まれて禰宜にはなれな

った。五〇歳で和歌所から出奔、出家。この中世随一の書物は、それから八年後の二二二年に成立した。

かくして長明は嘆息する。「私にはわからない。生まれたり、死んだりする人が、どこから来て、どこへ去っていくのか」。長明は葛藤する。「すべて世中のありにくく、わが身と栖との、はかなくあだなるさま」に感う。ここにあるのは達観ではなく逡巡だ。一心不乱の修行ではなく、風雅と倦怠の明け暮れだ。一寸四方(五畳程度)の飯の庵で四季の移ろいを感じながら、「念仏をするのが面倒になり、読経に気持ちが向かないときは、思いのままに休み、なまける」。濁れる水の流れるつ澄む」という山頭火の句がふと過る。難解な古典という勝手な思い込みを恥じる。

当代の詩人の訳文は、簡にして要を得た原文を尊重しつつ、等身大の言葉になっている。原文や訳者の丁寧なエッセイ、当時の京都の地図もあわせて収録されており、多角的に楽しめるのも嬉しい。

「いまの世は、どうだろうか。なぜ、こんなふうになってしまったのか」。八〇〇年変わらぬ眩きだろう。いつともなく歴史という河の水となって私たちの心に流れ込んでいる。流れてゆく。

(一五二頁 税込六九二円 9月刊)

竜のグリオールに 絵を描いた男

ルーシヤス・シエバード著
内田昌之訳 竹書房文庫



竜、それも巨大な竜は、憧れの存在だ。一頭でもいい、竜がいてくれたらよかったのにと思ってしまうのは、この世界に人間を超越する存在が見当たらないせいかもしれない。実際に竜がいれば人間はとても迷惑するはずなのに、竜に託された幻想が消えることはない。考えてみれば不思議なことといえるかもしれない。

本書は、魔法使いによって何千年も前に身動きを封じられてなお人間の精神に干渉し行動を操る神のような巨竜グリオールを描き、私たちのそんな身勝手な願いを小説の世界の中で見事に叶えてくれる。竜の肺の外側に生える苔から興奮剤を作るといようなディテールや、知らず知らず竜の意思に操られてしまう恐怖の描写を通して、巨竜の存在が鮮やかに描き出される傑作。巨竜による精神干渉はその地の住民にとっては当たり前のことなので、殺人を犯しても竜に操られていたのだ

と陪審員を納得させられれば無罪になるというのもおもしろい設定である。

奇想天外な方法で巨大な竜に挑む男を描く表題作ほか四編からなる短編集であるが、私には中でも竜が変身した女性マガリと目的のない人生を生きる男性ホタとの、戸惑いと情熱が混在する異種愛の物語「嘘つきの館」とりわけ印象深かった。グリオールの意思に従うだけのいわば全く自主性のない愛がホタに希望と目的を与えたという逆説に加え、竜の飛翔というイメージをホタの心境の変化に重ねる手法が見事。

(投稿・トトロ)
(四三二頁 税込二一八八円 8月刊)

教養としてのワインの世界史

山下範久著
ちくま文庫



ワインをおしゃ
れで手の届きに
くい飲みものと思
っていないだろうか。

ポルドーやブルゴ
ーニュという地名には、確かに、そのような響きがあることは否めない。しかし、ワインは俗に「人類最古のお酒」とよばれるほど単

純なお酒でもある。何らかの外圧でブドウの果皮が破れ、果汁が果の外側の自然酵母と接触すると、ほぼ自然に醸成されるからだ。

このような小話にはさまれながら、ワインを切り口に、グローバル化が分析されていく著者によれば、冒頭のようなイメージが重視されはじめたときがある。大量生産・大量消費が通用しなくなった「ポスト・フォードリズム」以降だ。換言すれば、物質的に豊かになり、イメージによる付加価値販売戦略が展開された時期とその軌跡は重なる。喉の渇きをいやすためのワインが、他者の羨望を得るために記号化・情報化された。

一方で、ワインそれ自体は特定のメディアによって画一化した。そのため、多様性の擁護が主張された。個々の産地の個性が表現されたワインがよいとする「テロワール主義」の登場である。この二項対立は、他者からの承認をえようとする「差異」志向と他者を認めようとする「本物」志向として捉えなおされる。二つの志向を両立したところに、グローバル化の果実があると、著者は結論する。

本書は講義調で書かれており、読みやすい。読了後には、ワインに関する雑学と、世界で進展する現象を理解するための知識を得ることができるところ。

(モロイ)
(三三五頁 税込九七二円 11月刊)

ガルシア・マルケス

「東欧」を行く

ガブリエル・ガルシア・マルケス 著

木村榮一訳 新潮社

「すべては六月十八日午前十時、フランクフルトのとあるカフェではじまった。(略)」



八時に西側世界最後の村を通過した」。

『百年の孤独』のノーベル賞作家は、作家として立つ以前に新聞記者をしていた。本書は、一九五七年六月から九月にかけて鉄のカーテンの向こう側の東欧諸国をふとしたきつかけで訪れて記したルポルタージュである。

「私は客を迎えるために着飾ったソビエト連邦を見たいと思わない。女性と同じで、それらの国々の寝起き姿を見る必要があるのだ」。旅を貫くのはそんなユーモアと気概であり、明確な5W1Hと詳細な修飾語がそれを支える。国境での長時間の検問を担うのは文盲の兵士。東独ライブツィヒでは国営ナイトクラブのウェイターの一カ月の給料がゴワゴワの生地シャツに消えると知る。一方でチェコの生活水準は高く、統制の気配もない。カトリック教徒にして共産主義者でもあると

いう隣国ポーランド人の矛盾も喝破する。そしてモスクワ、赤の広場の霊廟では、保存されたスターリンの遺体の女性的で繊細な手に衝撃を受け、街中では格差に厭きて西側の暮らしに憧れる若者に変化の兆しを見る。プダペストのプロレタリア地区のバルのトイレは指導者を罵倒する落書きであふれている。

冷戦下の東欧の現実とは小説よりも奇妙に映る。やがて中南米を舞台に虚実ないまぜの物語を書き継いでいった作家の脳裏には、時にこの旅の記憶も蘇ったろう。文学的にも史料的にも面白く読めること請け合いた。(春海)

(二〇二頁 税込三三六円 10月刊)

海洋保護区で魚を守る

——サンゴ礁に暮らすナミハタのはなし

名波敦ほか著 恒星社厚生閣

自然資源の保全

のためには即座に人間の活動の全面的な禁止をするのが理想かもしれないが、実際には一定の配慮が必要とされる。というのも、多くの場合その資源を暮らすの



うな人々がいることを踏まえた保全の仕方の一つとして、本書では一通りの取り組みが挙げられる。本書では漁業関係者の理解と協力を得ながら八重山諸島で食用とされてきたナミハタの生態を正確に理解することが、持続可能な海洋保護区の設定につながっている。

第一部「産卵場」に集まる魚たち」では産卵集群(特定の場所・特定の時期に産卵のために作る群れ)をなす魚の中でも特にナミハタに注目し、産卵集群の習性が乱獲に利用されてきた背景から人間の活動を制限する海洋保護区の必要性を説いている。第二部「産卵場をめぐる調査」ではナミハタの産卵の場について著者らのフィールドワークを経て説明し、そこから海洋保護区をどこにどれだけの期間設定するかを検討している。第三部「産卵場を守る取り組み」ではナミハタの減少から海洋保護区実現までの経過を描きながら、研究者の漁業者との相互的な活動を紹介している。そして保護区を持続させていくためには、広報や予算確保などの多面的な取り組みが必要になっている。

資源量の科学的手法による推定から利害関係者の理解促進までをカバーする本書は、水産資源保護のためのトータルな視点を与えてくれる。

(二三八頁 税込二七〇〇円 9月刊) (投稿・英哲)

Pythonによるあたらしい データ分析の教科書

寺田学、辻真吾、鈴木たかのり、
福島真太郎著
翔泳社



データ分析のスキルが有用であると言われるようになってから久しい。

実際、研究でも、

ビジネスでも、趣味でも、データを収集して加工し、そこから情報を引き出す技術は必ず役に立つものである。とはいえ、必要とされる予備知識はプログラミングや基礎的な数学、統計学と多岐にわたり、なかなか始めにくいのも事実である。

データ分析を始めてみたい人にとって、必要な予備知識から実際の作業まで解説した本書はよい手引きとなってくれるだろう。データを分析する方法についての解説書は数多く出版されているが、その中でも、本書は内容の取捨選択の秀逸さが光る。三百ページほどと技術書にしてはかなりコンパクトなほうであるが、だからといって大事なことが省略されているわけではない。プログラミングに使う言語であるPythonの解説も含めて、必要とされる知識や、道具の使い方が一通り解説さ

れている。これ一冊でデータ分析を始められるはずだ。特に、必要とされる数学の解説に一章を割いている点は非常に親切である。とはいえ、プログラミングの経験が全くないという人は、ほかの入門書を参照しながら読み進めたほうが理解しやすいと思われる。また、紙幅の都合上、分析手法の詳細については省かれている。より深く知りたい人は、参考文献を参照する必要があるだろう。

総じて、まさに「教科書」的な一冊であり入門書として優れている。この春休みから、データ分析を始めてみては。

(三三八頁 税込二六七八円 9月刊)

(藤餅)

機械カニバリズム

人間なきあとの人類学へ
久保明教著 講談社選書メチエ



ここ数年、AIをめぐる言説がメディアをにぎわせ、今では一日落ち着いた印象もあるが、

そこでなされた無数の言説がはたして我々と技術の関係を問う議論のレベルを向上させたのだろうか。本書の背景には、未だに両者の関

係が紋切り型でしか語られないことへの違和感が反映されているのではないかと思う。

著者曰く、これまでなされてきた技術論は主に二つに大別できるという。一つは技術の変化が社会の本質を決定づける技術決定論で、もう一つは技術を特定の文化集団が目的を達成するために用いる中立的な手段とみなす社会的構成論である。しかし、両者はともに人間社会と技術という単純な二項対立に陥ったままである。

南米の先住民は、動物という他者も人間として丁重に扱う。ジャガーが飲む獲物の血は、人間にとってのビールなのだといった具合に、つまり、彼らにとっては全てが人間なので、どんな食事も「カニバリズム」に当る。そこから著者は機械人間という我々の新たな在り方を模索する。我々は技術の進展に伴い、機械という他者の視点を「喰らう」ことで常に自らを作り変えている。例えば、藤井聡太の「人外」の強さが示しているように、棋士はAIソフトとの対戦を通してその思考法を学び、既存の「定石」を変容させることができる。我々と機械は決して交わらない硬直した存在ではなく、接触することで互いに対して不断に形を与え、形を受け取る粘土のような存在なのだ。

(二四四頁 税込一七八二円 9月刊)
(投稿・NN)

中井久夫との対話

生命、こころ、世界

村澤真保呂、村澤和多里著

河出書房新社

共著者は社会学

部教授の兄と臨床
心理士の弟。精神
科医である中井久
夫とは幼少時から

触れ合ってきた。やや特別な関係性を背景に
これまで自他ともに臨床家として捉えられて
きた中井を哲学や思想の面から描き出す。

中井によるサリヴァンの自己システム概念

解釈には、かつて中井がウィルス学者だった
ことと結核菌病体験があったことが関係して
いるという。そこから免疫学や感染論による
洞察を得て、「自己システム」を「哲学的自己」
よりも「免疫系」に近いものとし、また
統合失調症は全身的な「自己免疫疾患」であ
り、本来攻撃してはならない「自己」を誤っ
て攻撃してしまう病であるとした。この病を
緩和させるには患者の「内なる自然」を復活
させる必要があると説くその根底に、心身二
元論を超え、身体とは「さまざまな流れが交
錯する開かれた場である」とする思想を見る。
臨床家としての中井には、患者の「リズム」



や「流れ」を重視し、それを生かしながら動
きかけていく実験精神があり続けた。

終盤の章で書き手は社会思想史を専門とす
る兄に移り、中井の仕事とその思想を、現代
における諸問題の「治癒」と「回復」のため
の手引きと位置付ける。自然破壊は留まるこ
とを知らず、いまや「入新世」という新たな
地質年代に突入したときえ言われる。そんな
中、病や障害により生命のリズムが狂った人
たちの真解過程をつぶさに見続けた中井の思
想とその姿勢は、これから生き抜く上で参
照すべきものと提起する。(投稿・コ☆メ)

(二四八頁 税込二七〇〇円 8月刊)

技術の完成

フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー 著
F・G・ユンガー 研究会訳
人文書院



近代以降の絶え
間ない技術革新は、
今日我々が享受す
る文明の豊かさを
もたらす一方で、

様々な矛盾や問題を生み出した。科学技術の
発達、前世紀の二つの大戦における大量殺
戮兵器を生み出し、東日本大震災以降の脱原

発および核エネルギーの利用を巡る議論、情
報技術の発達による労働時間の増大等、技術
革新と人間を取り巻く環境との間には常に大
きな矛盾が孕まれている。

こうした矛盾や問題にいち早く気づき、現
代のエコロジー思想の先駆けともなる思想を
展開したのが、本書フリードリヒ・ゲオル
ク・ユンガー『技術の完成』である。著者は
保守革命派の作家エルンスト・ユンガーの弟
であり、本年はこの思想家の生誕二二〇周年
に当たる。著者は近代の合理主義や機械崇拜
の流れの中で、機械的法則性が人間を支配す
る状況に異を唱える。前世紀前半において環
境論が議論され、近年脱原発を推進するドイ
ツでは、ハイデガーの技術論には少なからぬ
影響を与えたと考えられている。

ヴェルヌの空想科学小説を例に国家に代わ
り技術がユートピア的考察の材料をもたらす
事を述べた「技術とユートピア」、技術の進
歩と大衆の形成の連動性を論じた「技術と大
衆形成」等、重要な哲学思想に触れながら、
技術文明に対する批判的考察が成されている。
この未だ知られざる作家の本邦初訳は、当
の作家の日本における研究会の大きな成果で
あり、多くの示唆を与えてくれる。

(三三七頁 税込四八六〇円 (投稿・M・N)
10月刊)

原民喜 死と愛と孤独の肖像

梯久美子著 岩波新書

「もし妻と死別したら、一年間だけ生き残らう、悲しい美しい一冊の詩集を書き残すために……」

原民喜の人生は、死と愛と孤独である。もし彼が冒頭の通り妻と死別して自殺していたら、読み返されることはなかっただろう。

本書は原民喜という人物を「死の章」「愛の章」「孤独の章」という構成で丹念に追及する一作だ。冒頭の原の自殺から始まる書き出しは唐突に思えながらも、読み進める内に彼の死が全ての始まりだったように思えてしまう。誕生から自殺まで描く本書は、一つの映画を見ているように進んでいく。

そして彼の自殺を引き延ばした原爆。妻の死だけでなく、彼は広島への死を書くために戦後六年を生きた。名作「夏の花」には、恨みや政治の話はなく、ただただ失われていく広島が描かれている。泣けなかった人のために悲しみを描き、死にきれなかった人のために彼は死を描いた。細く弱い人々の声を、遠い時代の人に伝える力を文学が持っているのだと、本書は教えてくれる。

(きもの)
(二二二頁 税込九二九円 7月刊)

幸福とは何か

思考実験で学ぶ倫理学入門

森村進著 ちくまブリマー新書

「幸せってなんだっけ？」明石家さんまならずとも誰もが直面する、このありふれた問いに、本書も応答する。しかしその応答は、どこかの誰かの人生論でも、教科書的な記述に満ちた学説史でもない。ここに展開されるのは、数多くの「思考実験」とともに検討される一風変わった幸福論である。

本書では、幸福を「快い心理的状态」と考える「快楽説」、〈欲求が満たされること〉と考える「欲求実現説」、そして〈複数の客観的な要素から構成される〉と考える「客観的リスト説」、の三説が主に検討される。それぞれの説で説明できる幸福とできない幸福が、文中で提示される数多くの「思考実験」によって、立体的に浮かび上がってくる。

展開される議論の中で、これら三つの説やその折衷説は、その内部でさらに細かく分類される。頭は混乱するかもしれないが、それは決して不幸なことではない。私たちは、その諸説の中から、どの説に一番共感できるかによって、自分がかつ幸福観をより明確にすることができるよう。

(八雲)
(二四〇頁 税込九二八円 9月刊)

日本の税金 第3版

三木義一著 岩波新書

学ぶ機会が少ないにもかかわらず、知らなければ損をするのが税金の知識である。制度を十分に知らなければ、税金を払いすぎる。しかし、複雑すぎてよくわからないという方も多いのではないか。例えば、所得と収入の違いについて説明できるだろうか。

日本の税制について平易に解説する本書は、税に関する様々な疑問を解明してくれる一冊である。内容としては税金に関する具体的な手続きの解説ではなく、原理・原則に関する説明が主である。なぜそのような税金が設定されているのか、そして、その税額がどのように決められているのか、といった事柄について解説される。また、そうした目論見がどの程度成功しているかについても述べられる。その語り口は決して平板でなく、読み物としても非常に面白い。

もちろん、本書を一冊読んだからといって節税のプロになれるわけではない。しかし、何も考えずに税を納めるのではなく、その理非についての意見を持ったうえで支払うことができるようになるはずだ。

(蔵餅)
(二五六頁 税込九〇七円 9月刊)

「物語り」としての『戦争と平和』

一九世紀ロシアの文豪、レフ・トルストイ作『戦争と平和』（藤沼貴沢、全六巻、岩波文庫）は、世界文学史上に残る傑作と言われる。心理分析小説の側面と歴史小説の側面を併せ持つことも、このように呼称される一因だろう。

心理・歴史小説の側面

前者の好例は、第二巻におけるピエール・ベズーホフ伯爵の心理的葛藤だ。最初の妻となるエレンに婚約をもちかけようとして、彼がためらう場面がある。ここでは、女性的な魅力に惑わされ、理性的な判断がくたせない彼の心情がよく描かれている。

「『いったい、これはどういうことなんだ？ 必要なのは決断だ！ まさかおれに決断力がないわけじゃあるまい？』／彼は決断しようとしたが、「…」彼のなかにあった決断力が、今度の場合にはなくなっているのを感じて、恐ろしくなった。「…」欲情が彼をとらえつくした日以来、その欲望は罪深いものだという無意識の感じが、彼の判断力を麻痺させてしまっていた。」

この場面は、このように、主としてピエールの立場から描写される。この事実がここでは重要だろう。この場面が起点となり、物語のその後の展開に大きな影響を及ぼすからである。ここでの内的葛藤は、ピエールをフリーメーソン加入に駆り立てる。最終的には、ナポレオンによるモスクワ侵攻の段階で、戦争への参加をピエールに決意させることにつながるからでもある。

本書の歴史小説の側面は、史実が物語の基調をなすことだけにあるのではない。作者の歴史上の事件に対する考察が、ところどころで披露されることも、こうした側面の印象を強めている。例えば、

第四巻の冒頭では、ナポレオンがロシアに戦争をしかけた原因の究明を行っている。当時でさえ、すでに歴史となっていた事件を、「人間のな目で見直すことから始め」ることによって、生き生きとした「歴史／物語」に変貌させることができたのだろう。

語りの観点から

これまでの二側面とは別の観点から、この小説における戦闘描写を眺めてみよう。この小説における戦闘は主に三つある。アウステルリッツの戦い（一八〇五年）、ポロジノの戦い（一八二二年）、そしてナポレオンのロシア遠征（同年）である。とりわけ、アウステルリッツの戦いは、どの視点から物語を語るかという問題を考えるのに適している。

俯瞰的な視点ではなく、一個人（アンドレイ）の視点から戦争を描写しているからだ。アンドレイが「自分の目の前に起こっていることが理解できず、あたりを見まわしている」という記述は、この場面における制限された視野を保証している。特定の人物の視点を通して戦争を描くことで、戦闘場面の混乱や緊迫感がうまく伝えられている。

二〇世紀フランスの哲学者アランは、本作品が「戦争というものの偽りのないところ」を描いていると称賛した。戦争とは何かを知るうえで、本書が貴重な文学作品であるのは間違いない。一方で、古典文学を読む醍醐味は、多様な解釈が許される点にある。本作品を、語りという観点から読むのも一案かもしれない。時間に余裕のあるときに「読（再読）」をすすみたい大作だ。

（モロイ）



社会科学という残照

「方法的統合」を追いかけて

村上篤直著『評伝 小室直樹』（ミネルヴァ書房）は二〇一〇年に物故した京大理学部出身の「ソ連崩壊の預言者」評論家小室直樹のハードカバー上下二巻の評伝である。重厚長大な本書は出生に関わる記述などで寄り道も目立つほか、著者の「命を救って下さった小室への情念に辟易させられるところも目立つ。

しかし、それでも評者は本書から学ぶところが極めて多かった。それは同郷同学の渡部恒三からスナックのママまで膨大な取材により成り立った小室像の全人的な素描とそれを通じて戦後日本の知的空間の叙述による。戦後日本の再興を念じて平泉澄主宰の青々塾へ通塾し、京大の数学から阪大経済の市村貞一ゼミ、ミシガン留学を経て東大の政治学へ転籍し、社会学の富永健一ゼミの数学アドバイザーとして花開く。東京都の社会指標作成への関与なども含めて、小室はその奇矯な言動から想像されるような周縁的地位ではなく、社会科学に必要とされる数学能力の上昇に乗る形で一九七〇年代の本邦の社会科学の概要に——仮に学術ポストがなかったとしても——位置づけられることがわかるのだ。

だから下巻にかかる『ソビエト帝国の崩壊』（一九八〇年）の大ヒットによる小室のカップブックス——光文社のライター化と、小室が依拠する構造機能分析の退潮とが相俟っての小室の「研究者」としての退場がなおさら哀しみを帯びる。ライターになってゆく小室への川島武宣の惜別（下巻一四頁）に目頭を熱くするのは評者のみではあるまい。仮説構築による統合理論にしか興味がなく、だからソ連も日本も中国も韓国も説明できた男の一代記。

「ディレクタント」として、「歴史家」として

さて次に紹介したいのは服部龍三著『高坂正堯——戦後日本と現実主義』（中公新書）である。高坂は京大法学部の教員を務めた本邦の国際政治学者の代表格であり、歴代自民党政権のブレーンでもあった。そんな彼が小室と対になるのは違和感があるかもしれない。しかし、本書から浮かび上がるのは、小室とも通底するような高坂の、ウィーン体制研究を大成せずに点々と研究テーマを変え、古典的歴史書を愛好する「ディレクタント」としての姿である。殊に歴史無き理論を厭いながら、自己が歴史家であることを否定する高坂と、ケンブリッジの歴史系研究室に留学した弟子「歴史家」中西輝政の交錯は本書の白眉ともいえる。高坂の東京論壇への影響力、「現実主義者」仲間のはずの永井陽之助との相克、そして一九九六年没の高坂のポスト冷戦期へのまなざし——改憲論者への転向——と読みどころ満載で、評者には京大法学部肝煎りの『高坂正堯と戦後日本』より紙価高く思えた。

それは高坂に知遇を得ながら講筵には列せず、出身学部は京大でありながら、学位を神戸大で取得した著者服部と高坂との距離の妙がなせる業だろう。服部は思想史家ではなく政治史家であるが、本書が実は代表作となることを評者は疑わない。

二組三冊が全て昨年刊の新刊であるのは、社会科学が預言と統合の学だった時代の歴史化を指して余りある。これらの読書は二〇世紀の学智の追憶のみならず、学統や知的空間の考察を通じて、今日の学問を考える標ともなる。

（投稿・ついで）

編集後記

『綴葉』をご覧の皆さま、新年明けましておめでとうございます。というよりもまず、はじめまして。今号から編集委員に加わることとなりました、「八雲」と申します。

自己紹介の代わりと言ってはナンですが、書評誌の編集後記としてはいささか不適切な告白を、ここで一つだけ。実は私、「読書が苦手」なのです。私にとって読書行為とは、なるべくなら避けたいと思うような事がらで、強く決心しなければ実行に移せないような事がらなのです。そんな私が、この由緒正しい書評誌の編集委員となれたことには、底知れぬ「この世の不思議」というものを感じざるを得ません（まさに、事実は小説よりも奇なり、とでも言えましょうか）。

ともあれ、一度この編集委員にならせていただいたからには、このお仕事に全力で取り組んでいく所存です。至らぬ点多々あるかと思いますが、読者の皆さんにおかれましては、この「読書が苦手」な人間による（世にも奇妙な？）書評を、どうか温かい目で見守っていただければと思います。

これからもどうか一つ、よろしく願いいたします。（八雲）

当てよう！ 図書カード

残念ながら、2019年は消費税が8%から10%になることが予定されています。しかし、世界全体を見渡すと日本よりもはるかに税率が高い国が山のようにあることに気づかされます。では、以下のうちで日本の現在の8%より高い税率の国はどこでしょう。

1. 香港
2. タイ
3. トルコ
4. シンガポール

（ういろう）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（またはe-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは3月15日です。

10月号の解答

10月号「小津安二郎の遺作のタイトルは？」の答えは1.「秋刀魚の味」でした。図書カードの当選者は、盆地の屋根？さん、のんのんさん、きゅーりさん、はじめさん、オーシャンタートルさんです。また、8・9月号の当選者は、かめのこたわしさん、長老さん、Yさん、Iさん、佐間瀬勉さんでした（順不同）。おめでとうございます。（春海）

読者からひびく

〇「二年ほど前に編集委員をしていました。最近京大に非常勤として戻ってきました。」

（文・宵）

——本誌を手にとっていただけで、ありがとうございます。おかえりなさい！ 今後とも読者カードにてご指導をいただければ幸いです。

〇（8・9月号企画欄について）村田沙耶香の世界が好きなので、綴葉に記事が載っている嬉しいです。

（農・Y）

——村田さんは、その後も『地球星人』（新潮社）や『となりの脳世界』（朝日新聞出版）を出版されて活躍中ですね。本誌でもその感性に引き続き注目してまいります。

〇クイズいつも難しいですがおもしろいです。

（法・湖底の蟹）

——毎度のご応募、ありがとうございます。かつては四択でないものもありました。たとえば二〇〇七年四月号の問題はこのようなものでした。「ハムが〈dwiq〉、タマゴが〈pwick〉であるならば〈wxkgwz〉は何か？」ぜひ考えてみてください。

◆本年も『綴葉』をどうぞ宜しくお願い致します。幸多き一年でありますように。（春海）